

「これはわたしの愛する子。これに聞け。」

(マルコによる福音書9:2-9)

今日の福音はいわゆる「変容」の箇所です。今日の旧約聖書で、雲のなかでモーセに語りかけた神が、主イエスの弟子たちに語りかけます。モーセとエリヤは伝承では天に挙げられたとされ、それぞれ律法と預言者を表し、旧約を代表する二人とされていました。山の上でモーセとエリヤと主イエスが語り合うのを見たペトロは、その至福の時をそのまま留めておきたいと、仮小屋を三つ建てることを提案します。気持ちはわかります。目の前にモーセとエリヤ。とんでもなく特別なことが起こっているのです。なんとかして栄光を留めておきたかったのでしょう。しかしその時、雲が弟子たちを覆い、雲の中から「これはわたしの愛する子。これに聞け。」という声が聞こえます。この言葉を弟子たちは聞き、はじめて弟子たちははっきりと主イエスこそが旧約聖書を成就する、まことの救い主であることを知りました。「仮小屋を三つ立てましょう」と提案した時には、ペトロはこのまだ、主イエスとモーセとエリヤを同等とみなしていました。けれども、主イエスは旧約聖書を代表する二人と対等なものではなく、神からの真のメシアであることが神の言葉によってはっきりと示されました。神の栄光の輝きを示すことができるのは、主イエスお一人なのです。神はこの声によって、仮小屋を建ててこの光景をパッケージングするのではなく、主イエスに従って歩いて行きなさい、と弟子たちを導いたのです。この声によって導かれ、彼らは下山し主イエスの声に聞き従う者として派遣されていくのです。

主イエスの姿が変わる光景を目の当たりにした弟子たちは恐れに震えました。もしかすると彼らは、主イエスの受難予告を思い出し、恐れたのかもしれない。なぜなら、今日の直前の箇所は、主イエスをご自分の受難と復活について弟子たちに話しをする場面だからです。それを聞いたペトロは主イエスをいさめませんが、主イエスに叱られてしまいます。ペトロや弟子たちが期待していたメシアは、地上の栄光に輝くメシアであり、十字架上で死んでしまうようなメシアではありませんでした。しかし、その弟子たちが、主イエスに連れられて登った山の上で、今まことのメシアこそが主イエスであると知ったのです。であれば、あのときイエス様が言っていたこと、自分は十字架につけられる、ということは本当なのではないか、と弟子たちは恐ろしくなってしまった、ということが十分に考えられます。主イエスの受難と復活の予告を聞いた弟子たちは、主イエスの「死」という惨めな場面しか想像できなかったかもしれません。「復活」など彼らは思い及ばないものだったことでしょう。しかし、主イエスが知ってほしいのは「復活」なのです。なぜなら、主イエスが「死んで復活する」ことに、人間を慈しむ神の思いが表されるからです。だからこそ、主イエスは山上で、弟子たちに復活の栄光を垣間見せました。

そればかりか、恐れ、うずくまる弟子たちに神が語りかけました。主イエスに

聞くことによってこそ、恐れが喜びに変えられる、まさに死の先の復活へと導かれることを神は弟子たちに語りかけることで示したのです。今日の箇所ではこうして、主イエスが、神が弟子たちを復活の希望へと導くのです。

主イエスは最後に、このことをご自分の復活の時まで黙っていることを命じます。ご自分が栄光を受けられるのは、十字架の後、復活のときだからです。それまで、弟子たちは沈黙していなければなりません。人々にはまだ、主イエスの死しか伝わらないからです。

大齋節に入ろうとしているわたしたちも、かすかに垣間見える復活の栄光を仰ぎ見ながら、これからの大齋節を歩んでまいりましょう。「死」だけしか見えないう弟子たちに、主イエスが山上で「復活」を垣間見せたように、わたしたちには主イエスの復活の栄光がすでに明らかにされているのです。「これはわたしの愛する子。これに聞け。」という神の声の後、弟子たちがあたりを見回すと、そこには主イエスだけが彼らと一緒にいました。他でもないこの主イエスこそわたしたちと共におられ、導く方なのです。大齋節、この神の促しに従い、十字架へと歩む主イエスの姿を見つめ、主イエスに聞きながら歩んでまいりましょう。

『大齋節前主日特祷』

神よ、あなたはそのひとり子の受難の前に、聖なる山の上でみ子の栄光を現されました。どうかわたしたちが、信仰によってみ顔の光をあおぎ見、自分の十字架を負う力を強められ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられますように、主イエス・キリストによってお願い致します。